速報　総統選挙：蔡英文総統が圧勝で再選！
立法委員選挙も民進党が単独過半数獲得で完全執政へ！（2020 年 1 月）

石原忠浩（台湾・政治大学日本研究プログラム准教授、国際関係センター 助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

【摘要】

1 月 11 日に投開票された総統選挙は、現職の蔡英文総統と頼清徳前行政院長の「英徳配」（蔡頼ペア）が、歴代最高得票数となる 817 万票あまりを獲得し、韓国瑜高雄市長、宋楚瑜親民党主席の挑戦を退け、再選に成功した。

立法委員選挙でも民進党は、単独過半数議席となる 61 議席を獲得し勝利した。柯文哲台北市長が率いる台湾民衆党は、10 議席を獲得し、議会第三党の地位を獲得した。

新期立法院は 2 月に開会し、蔡総統は 5 月 20 日に第二期目の総統に就任する。

1．総統選挙の結果と各陣営の反応

2020 年 1 月 11 日に投開票された、第 15 回総統副総選挙は現職の蔡英文総統と頼清徳前行政院長ペアの「英徳配」が、817 万 231 票（得票率 57.13%）を獲得し、中国国民党の韓国瑜・張善政ペア（得票数 552 万 2119 票、得票率 38.61%）、親民党の宋楚瑜・余湘ペア（得票数 60 万 8590 票、得票率 4.26%）に圧勝した。県市別の得票数に目を移すと、16 県市で圧勝する結果となった。

本選挙で蔡総統が獲得した 817 万票は、馬英九元総統が 2008 年の選挙で獲得した 765 万票を上回り、史上最高得票数となった。投票率は、白熱した選挙戦を反映したこともあり、前回を 8 %以上も上回る 74.90%であった。

再選を果たした蔡総統は、記者会見で、今選挙の結果の重要な意義は、台湾の主権、民主が脅威にさらされた時に、台湾住民はもっと大きな声で台湾の堅持を叫んだことである。北京当局は、民主の台湾政府が、他者の恫喝や脅しに屈服しない事実を理解するよう望むと指摘し、両岸の相互尊重と良性な連動関係こそが、両岸住民の利益と期待に合致するものであるとした。

続けて、自身が両岸関係の平和と安定に対して承諾した事項に変化はないが、平和の維持には両岸双方に責任があり、自分は台湾海峡の平和と安定に尽力していくとし、中国政府に対し、「和平、対等、民主、対話」の八文字こそが両岸関係が良好な連動関係を再起動させ、長期にわたる安定と発展の鍵となり、両岸人民の間に広がっている距離を縮め、相互互恵利益が得られる唯一のアプローチだと呼びかけた。

台湾住民に向けては、今回の結果は、過去四年間の施政において我々が正確な方向を歩んできた

表 1　第 15 回総統副総統選挙の得票率、投票数

	蔡英文・頼清徳ペア	韓国瑜・張善政ペア	宋楚瑜・余湘ペア
得票率	57.13%	38.61%	4.26%
得票数	8,170,231	5,522,119	608,590

資料元：中央選挙委員会「總統副總統選舉 候選人得票數」（2020 年 1 月 11 日）
https://www.cec.gov.tw/pc/zh_TW/P1/s00000000000000000.html

桃園楊梅での民進党の集会

台北での国民党の集会に集った韓国瑜氏ファンの人々

ことを示すものであったが、選挙で勝利したことで反省を忘れることはせず、過去に不足や間に合わなかったところは、今以上にしっかりやっていくことを保証すると強調した。最後にともに選挙を戦った、韓候補、宋候補に対して一緒に民主選挙の旅を完成させたことに感謝の念を述べるとともに、政党の立場は異なろうとも将来的な協力の機会を信じると述べた。

2018 年 11 月の統一地方選挙で国民党候補として、22 年ぶりに高雄市長選挙に勝利した韓市長は、就任から半年も満たぬ時点で「韓流」ブームの勢いに乗り、党内予備選を勝ち抜き、現職高雄市長の身分として総統選挙に挑戦したが、蔡総統に 260 万票もの大差をつけられ惨敗した。今選挙の敗戦にき、韓市長は「自分の努力が足りず、皆の期待に応えることができなかった」と敗北を認め、蔡総統に勝利を祝福する電話をかけ、今後四年間は台湾人のために幸福で安心した日々を過ごせるよう努力することを望むことを強調した。

2000 年の総統選挙以降、副総統候補を含むと 5 度目の総統選挙の出馬となった宋楚瑜氏は、「最後の戦い」として本選挙に挑んだものの、前回獲得した得票率を大きく下回る結果となった。宋主席は、支持者に対して、今選挙結果の結論を国民が下したものとして決定を受け入れ、蔡総統に対しては、自分が総統候補による討論会で主張したことを忘れずに政策施行の際には、参考にしてもらいたいと述べたが、六度目の挑戦を含む今後の動向については、明言を避けた。

2．立法委員選挙の結果

全 113 議席を競う立法委員選挙は、小選挙区 73、比例代表区 34、原住民選挙区 6（山地、平地各 3）から構成されている。本選挙には、過去最多の 18 政党が出馬した。

与党民進党は、小選挙区では雲林県以南（屏東県 1 区は緑系無所属）で全勝するなど着実に議席を積み重ね、46 選挙区で勝利したが、比例代表は緑系の小政党が乱立し、票が分散したこともあり、前回から−5 となる 13 議席にとどまり、全体では前回の選挙よりも微減したが、どれでも単独過半数を超える 61 議席を獲得した。

国民党は、韓流ブームが隆盛を極めた時期には支持率でも民進党を上回り、一時期は過半数獲得と鼻息が荒い時期もあったが、韓流の退潮、比例代表区名簿に親中的とみなされる人物が複数名簿入りしたことにより、党内外から厳しい指弾を受けた挙句に、名簿の順位も再調整を余儀なくされるなど混乱をきたし、小選挙区では地盤とされた北部地域で苦戦するなど選挙区では 22 議席にとどまった。比例区では、民進党と同等の得票率を獲得し、13 議席を獲得し、合計では過半数の目標には程遠かったが前回比で微増の 35 議席となった。なお、比例名簿 15 位の呉敦義主席は落選し

桃園楊梅で声援を送る民進党支持者

た。

「非緑非藍」（非民進党非国民党）を標榜し、第三勢力の結集を掲げ、柯文哲市長の下に初の国政選挙に挑んだ台湾民衆党は小選挙区では、多くの候補者の知名度不足もあり、全滅に終わったが、比例代表選挙では着実に票を重ね150万票あまり、得票率でも11%あまりを獲得し、一気に五議席を獲得し、名実ともに第三政党の地位を獲得した。

前回選挙で初めて出馬し、５議席を獲得した時代力量は、民進党との距離感、路線対立に基づく党内抗争があり、前回選挙区で当選した議員が離党したこともあり、小選挙区で全滅したが、比例代表区では８％近い票を獲得し、どうにか３議席を確保した。

親民党は、前回の総統選挙で宋氏が総統選挙で10%以上の得票率を獲得するなど、健闘したこともあり、比例区でも３議席を獲得した。今選挙では郭台銘氏の支援を受け、党勢拡大を図ったが、「非藍緑」を掲げた民衆党と支持層が重なったこともあり、得票率も５％にとどかず議席なしに終わった。

本格的な国政選挙へ初めての挑戦となった独立左派を標榜する台湾基進党は、小選挙区でも候補を立て、民進党が禅譲し、緑陣営全体の支援を受けた陳柏惟氏が台中２区で現職の国民党委員を退け、待望の初の議席を獲得した。また比例代表選挙でも南部を中心に票を重ね、議席獲得には至らなかったが、得票率３％を超えたことで政党補助金を獲得した。

表２　第10回立法委員選挙における各政党の議席数

	民進党	国民党	民衆党	時代力量	基進党	無所属
総計(前回比)	61（－７)	38（＋３)	５（＋５)	３（－２)	１（＋１)	５（＋４)
小選挙区	46	22	0	0	1	4
比例代表	13	13	5	3	0	0
原住民区	2	3	0	0	0	1

資料元：中央選挙委員会の資料を元に筆者が修正

表３　立法委員比例代表選挙区の政党別得票率、議席数

政党	得票数	得票率（%）	獲得議席数
民主進歩党	4,811,241	33.9774	13
中国国民党	4,723,504	33.3578	13
台湾民衆党	1,588,806	11.2203	5
時代力量	1,098,100	7.7549	3
親民党	518,921	3.6647	0
台湾基進党	447,286	3.1588	0

資料元：中央選挙委員会「不分區及僑居國外國民立法委員選舉 政黨得票數」（2020年１月11日）
http://www.cec.gov.tw/zh_TW/T4/s000000000000000.html

なお無所属議員が５選挙区で当選しているが、うちわけは緑系が３議席、藍系が２議席となっている。台北市、桃園市、屏東県が民進党系、花蓮県、山地原住民が国民党系となっている。

３．選挙を終えての雑感

今回の総統選挙で、筆者は1996年の初の民選総統選挙から７回目の総統選挙を体感したことになる。今選挙も無事に終わったことで、台湾の民主主義の基盤が更に堅いものとなったことを感じる。

ここでは、選挙後とりあえずの雑感を述べたい。民進党の勝因については、日本のメディアはじめ、多数の見解が述べられている。今選挙の争点としても挙げられた「中国との距離感」に代表される「中国要素」は、最大公約数であったとに概ね異論はない。「韓国瑜を総統にさせたら大変だという危機感が民進党に対する嫌悪感を上回った」という論点は、筆者個人とてしは最も痛感した要素ではあるが、ここでは「団結の民進党VS分裂した国民党」という構図に言及したい。

一昨年の統一地方選挙で一敗地に塗れた民進党が、昨年３月以降は「現職総統VS前行政院長」という前代未聞の予備選に直面し、一時的には党内の亀裂もさらに深まったが、年初の習近平発言や夏以降の香港情勢の先鋭化という追い風に乗り、８月以降は支持率で逆転し、当初沈黙を守り副総統候補に就くことを固辞していた頼氏を採りこむことで「党内整合」が完成したことで、「蔡総統再選」と「議会単独過半数確保」という明確な目標を確立し、表面上は挙党一致態勢で選挙に臨むことができたというのが筆者の偽りのない思いである。

その一方、統一地方選挙で大勝したことで政権奪還の可能性と雰囲気が高まった国民党は、複数の有力者が総統候補に名乗りを挙げ、早くも予備選の段階から混乱を生じ、公認候補選出後は、党中央が郭台銘、王金平らとの関係修復に失敗しただけでなく、韓候補と党中央との関係すら脆弱なまま、「不団結の国民党」のまま選挙戦に突入していく中で、次々に明るみに出た韓候補に関する事案（スキャンダルというほどではなかったが）に対し、同人の個人的特質に厳しい目が向けられるようになり、最後は「香港情勢」がとどめを刺したというのが筆者の実感である。

開票から１週間の時点で、韓候補は高雄市長の職務に復帰しているが、党内では次期主席選挙選出にとどまらず、次世代の議員や党員からは、あるべき対中国路線の検討、党改革や「革命」までもが議論の遡上にのぼっており、引き続き注視が必要な状況になっている。春節以降に進展する韓市長に対する罷免案の状況とともに次号以降報告する予定である。

民進党の勝利宣言集会に集まった人々